不空羂索観自在マンダラにみる人間存在の二元性

――ネパールの密教儀礼から――

佐久間　留理子

1．はじめに

ネパールのカトマンズ盆地には、インドから伝えられた大乗仏教や密教が、インド的な要素を濃厚に残しながら現在もネワール族によって信仰されている。このような伝統的仏教はネワール仏教と呼ばれ、インド仏教滅亡後も南アジアにおいて存続する仏教として注目される。仏教では一般的に、悟りを目指し修行する宗教的エリート（僧侶）と、世俗的生活をおくり出家を支える一般信者とが相互依存的に共存してきた。他方現在のネワール仏教において両者は各々世襲化され、出家カーストと在家カーストという形態として共存する[(1)]。つまり在家カーストの人は、僧侶になりたくても出家カーストの構成員にはなることはできず、二元的な人間存在が世襲的に固定化されている。出家カーストは、儀礼を専門的に行うヴァジュラーチャーリヤ（金剛阿闍梨、以下 VA と略す[(2)]）と、仏像や絵画を制作するシャキャとに大別される。出家カーストの僧侶は、妻帯するとともに、一般信者からの世俗的な要望にも応える。例えば VA は、観想法によって仏との一体化を目指す秘儀的（esoteric）な儀礼を行うが、その儀礼には現世利益を求める一般信者（施主）も参加する公開的な（exoteric）性格がしばしば付加される[(3)]。

ネパールの密教儀礼の二面性を顕著に表すものには月齢白分八日に行われる「アシュタミー・ヴラタ」（Aṣṭamī-vrata，略号：Av）、もしくは「ウポーシャダ・ヴラタ」（Upoṣadha-vrata）がある。これは断食行や八斎戒の

遵守をともなう「ヴラタ」儀礼の一種であり、不空羂索観自在マンダラを中心に礼拝、供養するものとして知られている[(4)]。この儀礼は導師の部と施主の部から構成され、後者は導師の指導のもと、施主が実践する。現行の儀礼では、導師の部の「三三昧」（tri-samādhi）と呼ばれる三段階の観想法及び導師と施主の部に共通する供養法において、多尊形式の不空羂索観自在[(5)]マンダラが合計四種類（タイプ１－４、略号：T1-T4）登場し重要な役割を果たす[(6)]。

Av の儀礼について、Locke［1980, 1987］は概略を公表するが、上述の四種の不空羂索観自在マンダラの象徴性については十分に考察していない。またこれらのマンダラが、秘儀的、公開的という視点からみて、各々如何なる機能を有するのかという点についても十分に解明していない。一方導師の部に登場する三三昧は、金剛界法のマンダラ儀軌に由来する。例えばそれは『サルヴァヴァジュローダヤ』（*VU(1), (2)*）や『クリヤーサングラハ』（*KS (1)-(4)*）、また後者に基づいてネパールで編纂されたとされる『ヴァジュラダートゥ・ムカークヤーナ・デグリヴィディ』（*VDV(1)-(4)*）［乾 1984］に説かれ、さらに「チャクラサンヴァラの三三昧」や「悪趣清浄の三三昧」にも説かれる[(7)]。これらについては既に研究がなされているが、Av において実践される「不空羂索観自在の三三昧」について詳しい先行研究はみられない[(8)]。

本論は現行の儀礼に基づき[(9)]、従来の研究で取り上げられていない四種の不空羂索観自在マンダラの象徴性や機能について考察し、さらにそれらのマンダラが宗教的エリート（特に VA）と一般信者という人間存在の二元性と如何に関わっているのかを指摘したい。

２．Av の資料

現行儀礼では、VA は印刷本をしばしば参照する。それにはバドリーラトナ本（B）やヴィカーサラトナ本（V）が知られている。B には「三三昧」という語はみられないが、後述する不空羂索観自在の T3、T4 が説かれる[(10)]。また V には「三三昧」の箇所に、後述する T1-T3 が述べられる[(11)]。さらに V

には、導師の部における「三三昧」の後と、施主の部で実践される「吉祥な不空羂索世自在のヴラタ儀軌」（śrī-Amoghapāśalokeśvara-vratavidhi）の中の「華の布置」（puṣpanyāsa）に T4 が述べられる。[12]

一方これらの印刷本の内容と部分的に一致する内容を含む写本が見出される。例えば仏教資料文庫所蔵マイクロフィルムに収録された *Amoghapāśa-lokeśvara-samādhi*（*AS*）には、V の「三三昧」の冒頭部分を除く内容（T1–T3）が含まれる。[13] また Nepal-German Manuscript Cataloguing Project（NGMCP）に収録された A.D. 1650（N.S. 770）の年号を有する写本 *Amoghapāśa-pūjā*（*AP*）には、T4 が述べられる。その年号から推して、T4 は少なくとも17世紀半ばまで遡る。[14] さらに Gautam VA（G. VA）氏蔵の写本 *Pūjākarmasaṃgraha*（*PS*）には、Av の供養法が収録され、その中の「華の布置」に T4 が説かれる。[15]

3．Av の次第の概要[16]

実践儀礼は、導師の部と施主の部に大別される。まず導師の部から述べる。（1）太陽への閼伽水（sūryārgha）の献供を行い、（2）これから実践する儀礼の目的を施主の名前とともに述べる（pūjāsaṃkalpa）。（3）現前に描いた師マンダラの供養（gurumaṇḍalārcana）を行う。[17]（4）牛の五つの産出物[18]による浄化（pañcagavyaśodhana）を行い、（5）額に赤色の粉[19]を塗る。（6）導師用の実際のマンダラとして赤い布に単独尊の不空羂索観自在マンダラを白い粉で描く。[20] その布の上に台を設置し、台上の皿には金属製の八大菩薩の象徴である八吉祥[21]（aṣṭamaṅgala）と花を置く。また皿の中央には、須弥山を表す白い飾り物を頂く壺を設置する。この導師用の実際の立体的マンダラは、導師が仏と一体化するための外的な表象であり、後述する T1～T4 の機能を補完する。（7）T1–T3 が登場する不空羂索観自在の三三昧を実践する。[22]（8）壺、ヨーグルトを載せた二つの小皿、花、米、線香等が入った容器、八吉祥等を礼拝する。（9）尊像の供養（pratimādevatā-

pūjā）を行う。この供養では、布に描かれた実際のマンダラを挟んで導師の正面に設置された祭壇[23]の前方の、五つの旗が置かれた辺りに線香を供える。また鏡を小皿に置き、それに牛の五つの産出物を注いで花を添え、祭壇前に置く。さらに法螺貝から聖水を鏡に注ぐ。(10)「吉祥な不空羂索世自在のヴラタ儀軌」を行う。その中の T4 が登場する「華の布置」では、導師が布のマンダラに花を置き供養する。(11) 最後にバリ供養（balipūjā）を行い[24]、導師の部は終了する。

施主の部では、導師用よりも小さな赤い布が用意される。布の上方には左から順に、法、仏、僧を表したマンダラが、また下方には単独尊の不空羂索観自在マンダラが白い粉で描かれる。（1）師マンダラ供養を行った後、（2）導師は施主を弟子として受け入れる（śiṣyādhivāsana）。（3）十万仏塔を建立する[25]（lakṣyacaitya-sthāpanā）。（4）三宝マンダラを礼拝する[26]。（5）上述の導師の部（10）でも登場した T4 に華を置いて供養する。（6）白糸のヴラタ・スートラ（vrata-sūtra）の礼拝を行う[27]。（7）宝マンダラ印[28]（ratnamaṇḍala-mudrā）を結び、仏、法、僧のために宝マンダラ[29]（ratna-maṇḍala）を捧げる。（8）十善を遵守する誓いの証しとして腕にヴラタ・スートラを付ける。（9）最後にマンダラの諸尊を送り出す（maṇḍala-visarjanam）。(10) 導師は Av に関する物語を施主に語る。

4．不空羂索観自在の三三昧とマンダラ

4－1．「第一のヨーガと呼ばれる最初の三昧[30]」のマンダラ

（1）導師は、三宝と不空羂索観自在に帰命する。（2）観自在の簡略な姿を観想し、それと一体化する。これは本尊との予備的な合一に相当する。（3）両手に日輪と月輪を布置して浄化し、金剛合掌を行う。また五指に五股金剛杵を修習する。（4）聖水を入れる法具の法螺貝を加持する。供養雲を生み出し、華、香、塗香、飲食を加持する。（5）不空羂索観自在を極楽浄土において見た後、洗足水、閼伽水、漱口水等を捧げて招請する。（6）

Vには、次の三十三尊マンダラ[31]（T1）の諸尊が説かれており、導師は現前の布に描かれた単独尊の不空羂索観自在マンダラの上で各尊のために華を置いて供養する。下記の梵語の綴りは写本にあるものをそのまま記載した。

1. Amoghapāśa-lokeśvara（不空羂索世自在）（V, *AS*), Trailokyavijaya（降三世）（V, *AS*)[32], Amoghapāśa（V, *AS*)[33]， 2. Amoghāṅkuśa（不空鉤）（V), Amoghapāśa（*AS*)， 3. ārya-Tārā（聖多羅）（V), Bhṛkuṭī（*AS*), 4. Amitābha（阿弥陀）（V, *AS*)， 5. ārya-Bhṛkuṭī-Tārā（V), ārya-Tārā（*AS*)， 6. ārya-Sudhana［kumāra］（善財童子）（V), Bhṛkuṭī（*AS*)， 7. ārya-Avalokiteśvara（V)， Amoghāṃkuśa（*AS*)， 8. ārya-Khasarpaṇa（V), Śuddhana（*AS*)， 9. Hayagrīva（馬頭）（V, *AS*)， 10. Maitrīya（Maitreya）（弥勒）（V, *AS*)， 11. Gaganagañja（虚空庫）（V, *AS*), 12. Samantabhadra（V）（普賢), Sarvanirvaraṇa［viṣkuṃbhin］（除一切蓋障）（*AS*)， 13. Vajrapāṇi（金剛手）（V, *AS*)， 14. Mañjughoṣa（文殊）（V), Maitreya（*AS*)， 15. Sarvanīvaraṇaviṣkuṃbhin（V), 省略（*AS*)， 16. Kṣitigarbha（地蔵）（V), 省略（*AS*)， 17. Khagarbha（虚空蔵）（V）省略（*AS*)， 18. Vajrapuṣpa（金剛華）（V), Vajradhūpa（*AS*)， 19. Vajradhūpa（金剛焼香）（V)， Vajrapuṣpa（*AS*)， 20. Vajradīpa（金剛灯）（V, *AS*)， 21. Vajragandha（金剛塗香）（V, *AS*), 22. Vajrāṃkuśa（金剛鉤）（V, *AS*)， 23. Vajrapāśa（金剛索）（V, *AS*), 24. Vajrasphoṭa（金剛鎖）（V, *AS*)， 25. Vajrāveśa（金剛鈴）（V)， 省略（*AS*)， 26. Indra（帝釈天）（V, *AS*)， 27. Yama（閻魔）（V, *AS*), 28. Varuṇa（水天）（V, *AS*)， 29. Kuvera（多聞天）（V, *AS*)， 30. Agni（火天）（V, *AS*)， 31. Naiṛti（羅刹天）（V, *AS*)， 32. Vāyu（風天）（V, *AS*)， 33. Īśāna（伊舎那天）（V, *AS*).

次に上述の諸尊の配置について、Vに従って説明する。本尊の周囲の第一輪には、不空鉤等（nos. 2–9）が四方（東南西北の順）と四維（東南、南西、西北、北東の順）に存する。また第二輪には、八大菩薩（nos. 10–17）が四方と四維に存する[34]。さらに第三輪の四維には、金剛華等（nos. 18–21）

の金剛界三十七尊マンダラの外の四供養菩薩、また四門には金剛鉤等（nos. 22-25）の四摂菩薩、さらに門外の四方と四維にはインドラ等（nos. 26-33）の八方天がみられる。このように、T1 は予備的に不空羂索観自在と合一した導師が、極楽浄土からそれを招請し、現前の布のマンダラにおいて本尊として供養するための基盤と言える。

次に（7）塗香、華、線香、食物、ポップライスによる五種供養を行う。（8）八供養女の印を結び真言を唱え、（9）金剛鈴を鳴らしタッキラージャ（十忿怒尊の一つ）の真言等を唱える。(10) 不空羂索観自在を敬礼する文言（讃）を唱える。(11) 三宝、聖観自在に帰命する文言を唱え、本尊を満足させる。(12) 罪業を一切の仏菩薩の近くで懺悔する。

以上のように、「第一のヨーガと呼ばれる最初の三昧」は、次の第二のヨーガの三昧の前段階に相当する予備的なマンダラ観想と考えられる。[35]

4－2．「最も優れたマンダラの王と呼ばれる第二のヨーガの三昧[36]」のマンダラ

（1）導師は「オーム、アーハ、金剛水の灌頂を」等と唱えながら、五仏の付いた頭飾りを装着する。大日如来の妃（金剛法界女）や四波羅蜜菩薩（薩埵金剛女、宝金剛女、法金剛女、羯磨金剛女）等に灌頂を請い、自らが阿弥陀の化仏を付けたものと修習する。（2）五仏と四明妃[37]に華の布置と礼拝を行う。（3）慈悲喜捨の四梵住の修習を行う。（4）自らが自性清浄であり、空性の智金剛を本質とするものであると確認する。（5）器世間、即ち風輪、火輪、水輪、地輪、須弥山、四角形の楼閣を順に観想した後、楼閣の中に不空羂索観自在の三十尊マンダラ（T2）を観想し、本尊と一体化する。本尊は一面八臂で白く、頭上に金剛法の化仏を頂く。右の第一臂は不死の霊薬を有する与願印を示す。第二臂は数珠を、第三臂は羂索を持ち、第四臂は宝石を持って施無畏印を示す。左の第一臂は、茎の付いた千弁の蓮華を持ち、甘露の流れをたらしてスーチームカ（針の口をもつもの、餓鬼）を満足させている。第二臂は経函を、第三臂は三又棒[38]を、第四臂は水瓶を持つ。次に V, *AS* に従って本尊を含む T2 の諸尊の名称を挙げる。なおこれらの諸尊の

構成は T1 と類似するが、それとは異なり T2 では各々の尊容が説かれる。なお V と *AS* とでは、尊名と尊容はほとんど同様である。

1. Amoghapāśa-lokeśvara, 2. Amoghāṅkuśa, 3. Tārā, 4. Sudhanakumāra, 5. Bhṛkuṭī, 6. Hayagrīva, 7. Maitreya, 8. Kṣitigarbha, 9. Vajrapāṇi, 10. Khagarbha, 11. Mañjughoṣa, 12. Gaganagañja, 13. [Sarvanīvaraṇa-] Viṣkaṃbhin, 14. Samantabhadra, 15. Puṣpā, 16. Dhūpā, 17. Dīpā, 18. Gandha, 19. Vajrāṃkuśa, 20. 省略[39], 21. Vajrasphoṭa, 22. Vajrāveśa, 23. Indra, 24. Yama, 25. Varuṇa, 26. Kuvera, 27. Agni, 28. Naiṛti, 29. Vāyu, 30. Īśāna.

これらの諸尊の配置と象徴的意味について説明する。本尊の周囲の第一輪には、不空鉤等の五尊（nos. 2–6）が、東、南、東南、北、東北の順に位置する。第二輪には、八大菩薩が四方と四維に存する。弥勒（no. 7）は東に存し、黄色で龍華を持ち、与願印を示す。地蔵（no. 8）は南に存し、緑色で左手に水瓶を持つ。金剛手（no. 9）は西に存し、白色で金剛を持ち、与願印を示す。虚空蔵（no. 10）は北に存し、緑色で如意宝珠を持ち、与願印を示す。文殊（no. 11）は東南に存し、金色で剣と本を持つ。虚空庫（no. 12）は南西に存し、赤色で青蓮華を持ち、与願印を示す。除一切蓋障（no. 13）は西北に存し、水色で最上の宝石を持ち、与願印を示す。普賢（no. 14）は東北に存し、黄色で青蓮華を持ち、与願印を示す。第三輪には、四供養菩薩（nos. 15–17）が四維に存する。四門には、四摂菩薩（nos. 19–22）が、門外の四方と四維には、八方天（nos. 23–30）が存する。

これらの諸尊の中、八大菩薩は、バッタチャリヤ校訂本『サーダナ・マーラー』18番の「ローカナータ・サーダナ」所説の八大菩薩[40]と比べて種類や図像学的特徴が同じであり、インド密教の影響下にあることが窺える。また八大菩薩は、既に第三章（６）で述べたように布上の台の上に置かれた八吉祥によっても表現されており、観想上のマンダラと現前の実際のマンダラとは象徴的に結びついている。さらに八大菩薩は、カトマンズ盆地の八聖地（Aṣṭa-vītarāga）と象徴的に結びついており[41]、人々は Av を行う時、これら

を巡礼して八大菩薩を礼拝する。[42]

このように、導師は観想上のマンダラ（T2）の本尊と一体化することによって、八大菩薩を介して実際のマンダラと八聖地をも自らに重ね合わせる。こうした重層的な意義をもつ点に、三三昧の第二の観想の特色がある。

4－3．「最も優れた行為の王と呼ばれる微細なる第三のヨーガの三昧[43]」のマンダラ

（1）導師は、智マンダラ（jñānamaṇḍala）を見て引き寄せる。なおR. S. VA氏によれば、智マンダラは形をもたない智薩埵（jñānasattva）と同義であり、これが現象世界の形をもつ三摩耶薩埵（samayasattva）と合一させられると解釈される。[44]（2）無量光、不空羂索観自在、八大菩薩等の二十五尊の行為の印（karma-mudrā）を結び、真言を唱える。（3）四梵住を修習する。（4）空性に溶け込んだ［月］輪を、自らの心であると確認する。（5）身体の布置（aṅga-nyāsa）において、次に列挙する不空羂索観自在マンダラ（T3）の諸尊を自らの身体に引き入れる。なおVと*AS*との間では、尊名、真言、布置する身体部位（カッコ内）は概ね同様である。[45]両者で相違する箇所のみ記号を記す。

1. Amitābha（頭頂），2. Amoghapāśa-lokeśvara（心臓），3. Trailokyavijaya, Amoghapāśa（心臓の中央），4. Amoghapāśa（心臓の下），5. Hṛdaya（V），不明（*AS*），（部位不明），6. ārya-Avalokiteśvara（不明），7. Lokeśvara（不明），8. oṃ maṇipadme hūṃ（心臓），9. Tārā（［体の］右，不明（*AS*）），10. Bhṛkuṭī-tārā（V），Bhṛkuṭī（*AS*），（［体の］左），11. Sudhana［kumāra］（［体の］右（V），不明（*AS*）），12. ārya-Avalokiteśvara（不明），13. Hayagrīva（［体の］左（V），不明（*AS*）），14. Jaya（額），15. Vijaya（喉），16. Jaya（心臓），17. Varada（臍），18. Abhaya（秘所（V），二足（*AS*）），19. Maitreya（頭頂），20. Kṣitigharbha（両眼），21. Vajrapāṇi（両耳），22. Khagarbha（鼻），23. Mañjughoṣa（心），24. Gaganagañja（V），Sarvanīvaraṇaviṣkuṃbhin（*AS*）（喉（V），不明（*AS*）），25. Sarvanīvaraṇaviṣkuṃbhin（V），Samantabhadra（*AS*）（頭

頂），26. Samantabhadra（V），Gaganagañja（*AS*）（一切の肢体），27. Ajita（右肩），28. Aparājitā（左肩），29. Mārasainyapramardana（顔），30. Akālamṛtyupraśamana（心臓），31. Danada（右膝），32. Vasudhārā（V），Vasundharā（*AS*）（左膝），33. Acalavīra（右人差し指（V），不明（*AS*）），34. Jaya（右中指（V），不明（*AS*）），35. Vijaya（右薬指（V），不明（*AS*）），36. Jayavijaya（右親指（V），不明（*AS*））

このマンダラの構成員は、T1、T2のものと一部相違する。例えばJayaからAbhayaまでの諸尊（nos. 14–18）、及びAjitaからJayavijayaまでの諸尊（nos. 27–36）は、T1、T2には含まれない。これらの諸尊の中、Jaya, Vijaya, Varada, Ajita, Aparājitā, Mārasainyapramardana, Akālamṛtyupraśamana, Vasundharāは、後述するT4に含まれる。一方T3に説かれるTārā, Bhṛkuṭī, Hayagrīva, 八大菩薩等はT1、T2にも含まれる。従ってT3は、三三昧に登場するT1、T2と三三昧の後の供養法に登場するT4との中間的性格を有する。このように、T3は、T1、T2のマンダラの諸尊の一部を導師の身体において固定化するとともに、T4のマンダラ儀礼の予備的行為を行う機能をもつのではないかと考えられる。この後導師は、（6）バリの修習を行い[46]、（7）最後に百字真言を唱えて本尊を送り返す。

4－4．「吉祥な不空羂索世自在のヴラタ儀軌」のマンダラ

上述の三三昧において観想される三種のマンダラは、仏との一体化を目指す中期密教的観想法の影響下にあり、基本的に秘儀的な性格をもつ[47]。一方導師と施主の部に共通するマンダラ[48]（T4）は、一般信者も直接的に関与することのできる公開的な性格をもつ。次にそのマンダラの諸尊を列挙する。

1. Amoghapāśa-lokeśvara（V, B, *PS*），省略（*AP*），2. Amoghāṃkuśa（V, B），Amitābha*（*AP, PS*），3. Tārā（V, B），Amoghāṃkuśa（*AP, PS*），4. Amitābha*（V, B），Tārā（*AP, PS*），5. Bṛkuṭī（B, *AP, PS*），Bṛkuṭī, Tārā（V），6. Sudhanakumāra（V, B, *AP, PS*），7. ārya-Avalokiteśvara（V, B, *AP, PS*），8. Khasarpaṇa（V, B），Khaśanyana

(*AP*), Khasarpānadhāna? (*PS*), 9. Hayagrīva (V, *PS*), Hayaṃgrīva (*AP*), Hayagarbha (B), 10. Ajita* (V, B, *AP*), Aparājitā* (*PS*), 11. Aparājitā* (V, B, *AP*), Jaya* (*PS*), 12. Mārasainyapramardaṇa* (V, B, *AP, PS*), 13. Varada* (V, B, *PS*), Akālamṛtyupraśamana* (*AP*), 14. Akālamṛtyupraśamana* (V, B, *PS*), Jaya* (*AP*), 15. Jaya* (V, B, *PS*), Vijaya* (*AP*), 16. Vijaya* (V, B, *PS*), Jayavijaya* (*AP*), 17. Jayavijaya* (V, B, *PS*), Abhayaprada* (*AP*), 18. Varada* (V, B, *PS*), Dhanada (*AP*), 19. Vasundharā (V, B, *PS*), Vasuṃdharā* (*AP*), 20. Abhayaprada* (V, B), Abhayaṃkali (*PS*), Pratyekabuddha* (*AP*), 21. Dhanaprada (V, B), Suvarṇṇavarṇṇaprabhāvinaditarāja* (*AP*), Dhanaṃdra (*PS*), 22. Pratyekabuddha* (V, B, *PS*), Siṃhavikrīḍitarāja-ta.* (*AP*), 23. Suvarṇaprabhādityarāja-ta.* (V, B), Supratiṣṭitamaṇikuṭakūṭarāja-ta.* (*AP*), Suvarṇaprabhavinadityarāja-ta.* (*PS*), 24. Siṃhavikrīditarāja-ta.* (V, B), Samantaraśmyugataśrīkūṭarāja-ta.* (*AP*), Siṃhavikriṃditarāja [a-ta.]* (*PS*), 25. Supratiṣṭhitamanikūṭarāja-ta.* (V, B), Vipaśvin-ta.* (*AP*), Supratiṣṭhitarāja-ta.* (*PS*), 26. Samantarasmyūgataśrīkūṭarāja-ta.* (V, B), Śikhina-ta.* (*AP*), Samantaraśmyākataśrīkūtarāja-ta.* (*PS*), 27. Vipaśvi[n]a-ta.* (V, B, *PS*), Viśvabhū-ta.* (*AP*), 28. Śikhi [n] a-ta.* (V, B, *PS*), Krakucchanda* (*AP*), 29. Viśvabhū-ta.* (V, B, *PS*), Kanakamuṇi* (*AP*), 30. K(u)rakucchanda-ta.* (V, B, *PS*), Kāśyapa-ta.* (*AP*), 31. Katakabhūti-ta. (V, B), Kanakamuni-ta.* (*PS*), 32. Suprakīrtitanāmadhyeya-ta.* (V, B), Suparikīrttitanāmadhyeya-ta.* (*AP*), Kāśyapa-ta.* (*PS*), 33. Samaṃtāvabhāsanirjitasaṃgrāmaśrī-ta.* (V, B), Samantāvabhāsavijitasaṃgrāmaśrī-ta.* (*AP*), Śākyamuni-ta.* (*PS*), 34. Indraketudhvajaśrī-ta.* (V, B), Candraketudhvajaśrī-ta. (*AP*), Suprakīrtitanāmadhyeya-ta.* (*PS*), 35. Ratnaprabhāseśvararāja-ta.* (V, B, *AP*), Samaṃtāvabhāśavijitasaṃgrāmaśrī-ta.* (*PS*), 36. Pratihatabhaiṣajyarāja-ta.* (V, B), Supra-

tihatabhaiṣajyarāja-ta.（*AP*）, Indraketudhvajaśrī-ta.*（*PS*）, 37. Vikrāṃtakāmane-ta.*（V, B）, Vikrāntavikamana-ta.*（*AP*）, Ratnaprabhāseśvararāja-ta.*（*PS*）, 38. Puṣpatārā（以下55まで V, B, *AP*, *PS* に記載有）, 39. Dhūpatārā, 40. Dīpatārā, 41. Gandhatārā, 42. Indra, 43. Yama, 44. Varuṇa, 45. Kuvera, 46. Agni, 47. Naiṛti, 48. Vāyu, 49. Īśāna, 50. Brahman, 51. Candra, 52. Sūrya, 53. Pṛthivī, 54. Vyomacitra（V, B, *PS*）, Vemacitra（*AP*）, Nāga.（ta.: tathāgata）

T4 には T1–T3 にみられた八大菩薩は含まれない。一方上記の＊印を付けた諸尊は、『不空羂索呪心経』（*APH*）にも説かれ、その数は二十九尊にのぼる。従って T4 は初期密教の陀羅尼信仰の強い影響下にあることが窺える。なお上述の T3 にも一部 *APH* 所説の諸尊が含まれるが、T1、T2 には一切含まれない。現在のネワール仏教では、法事の際に *APH* が一般信者の前で読誦されるので[49]、公開的な性格をもつ T4 に、この陀羅尼経典の諸尊が多数導入されたものと推測される。一方 T4 には Vipaśvin, Śikhin, Viśvabhū, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapa, Śākyamuni といった過去七仏がみられ（nos. 27–33）、遥かな過去からの衆生救済が表現される。また no. 25 の Supratiṣṭhitamanikūṭarāja-tathāgata と no. 26 の Samantarasmyūgataśrīkūṭarāja-tathāgata に似た名称が、各々大勢至、観自在の成仏後の仏名として『悲華経』（*K*）に述べられており[50]、T4 は遥かな未来の衆生救済をも表現する[51]。

5. 結　び

以上、Av の儀礼において重要な役割を果たす四種の不空羂索観自在マンダラについて述べた。T1–T3 は秘儀的な性格をもつが、特に T2 は重要である。導師は、このマンダラを観想し本尊との一体化をはかることによって、観想上のマンダラと現前の実際のマンダラとカトマンズ盆地にある八聖地とを、八大菩薩を介して自らに重ね合わせる。換言すれば導師は世間（娑婆世

界）を超えた仏となった眼で、再び世間を観察することになる。一方 T4 は公開的な性格をもつと同時に、一般信者と関わりの深い陀羅尼信仰や永遠に近い過去から永遠に近い未来に渡る衆生救済を表現する。このような秘儀的なマンダラと公開的なマンダラとが一連の儀礼の中で組み合わされることによって、ネワール仏教において世襲的に固定化された宗教的エリートと一般信者という人間存在の二元性は相補的に統合され、両者は分裂の無い、より包括的な人間存在として昇華されるものと考えられる。

参考文献

［一次資料］

AP *Amoghapāśa-pūjā.* ［NGMCP, H314/10］.

APH "*Āryāmoghapāśa-nāma-hṛdayaṃmahāyāna-sūtram.*"（聖不空羂索呪心経）、木村高尉『大正大学綜合佛教研究所年報』創刊号（1979）：242–256.

APK(1) 密教聖典研究会編 "Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part I."『大正大学綜合佛教研究所年報』20（1998）：13–54.

APK(2) 密教聖典研究会編 "Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part II."『大正大学綜合佛教研究所年報』21（1999）：88–128.

APK(3) 密教聖典研究会編 "Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part III."『大正大学綜合佛教研究所年報』22（2000）：1–64.

APK(4) 密教聖典研究会編 "Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part IV."『大正大学綜合佛教研究所年報』23（2001）：1–76.

APK(5) 密教聖典研究会編 "Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part V."『大正大学綜合佛教研究所年報』26（2006）：120–183.

AS *Amoghapāśa-lokeśvara-samādhi.*［Takaoka 1981: Reel No. R-DH 7, DH 303］

B *Amoghapāśalokeśvara-vrata-vidhi-kathā.* Ed. Badrī Ratna Vajrācārya, Kathmandu: Popular Ārti Printing Press, 1981.

HKN *History of Kings of Nepal: A Buddhist Chronicle.* 3 vols. Himalayan Traditions and Culture Series No. 5, Manik Bajracharya, Axel Michaels, Kathmandu, Himal Books, 2016.

H 『梵蔵漢対照・初会金剛頂経の研究・梵本校訂篇』堀内寛仁編著（上）（下）、1983.

K *Karuṇāpuṇḍarīka.* Ed. Yamada, Isshi. vols I, II. London: School of Oriental and African Studies, University of London. 1968a, b.

KS(1) *Kriyāsaṃgraha* における本尊瑜伽：梵文テキスト（1）、乾仁志、『密教文化』163：97-116、1988.

KS(2) *Kriyāsaṃgraha* における本尊瑜伽：梵文テキスト（中）、乾仁志、『高野山大学密教文化研究所紀要』5：133-160.

KS(3) *Kriyāsaṃgraha* における本尊瑜伽：梵文テキスト（下）、乾仁志、『高野山大学密教文化研究所紀要』7：91-112.

KS(4) *Kriyāsaṃgraha: Compendium of Buddhist Rituals An abridged version.* Skorupski, Tadeusz, Buddhica Britannica, Series Continua X, TRING: The Institute of Buddhist Studies, 2002.

PS *Pūjākarmasaṃgraha.* G. VA 氏（カトマンズ市）蔵写本。紙製、198 葉、完本、年代：A.D. 1864（N.S. 984）.

SM *The Sādhanamālā.* Ed. Benoytosh Bhattacharyya, 2 vols. Gaekwad's Oriental Series Vols. 26, 41, Oriental Institute: Baroda, 1968（1925, 1928）.

SvP *Svayambhū Purāṇa.* Ed. Min Bahadur Shakya and Shantaharsha Bajracharya, Nepal: Nagarjuna Institute of Exact Method（Digital Sanskrit Buddhsit Cannon）, 2001.

V *Aṣṭamīvrata-pūjā-vidhi.* Ed. Vikāsaratna Vajrācārya, Kathmandu: Spectrum Press, 2008.

VDV(1) *Vajra-dhātu-mukh' ākhyāna-deguri-vidhi,* 森口光俊『大正大学綜合佛教研究所』4：234-248、1982.

VDV(2) *Vajra-dhātu-mukh' ākhyāna-deguri-vidhi II,* 森口光俊、『佛教思想論集』（那須政隆博士米寿記念）成田山新勝寺刊、pp. 27-45, 1984.

VDV(3) *Vajra-dhātu-mukh' ākhyāna-deguri-vidhi III,* 森口光俊、『密教文化』（堀内寛仁名誉教授頌寿記念（４））162: 127-170、1988.

VDV(4) *Vajra-dhātu-mukh' ākhyāna-deguri-vidhi IV,* 森口光俊、『梵語佛教文献の研究』（声聞地研究会・密教聖典研究会編）山喜房佛書林、pp. 199-216, 1995.

VU(1) *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya* 金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現：梵文テキストと和訳（I）、密教聖典研究会、『大正大学綜合佛教研究所年報』8：224-258、1986.

VU(2) 高橋尚夫　1988「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現　第一瑜伽三摩地品：和訳」『密教文化』161：113-150.

［二次資料］

［外国語］

Bajracharya, Ranjana. 2003. *Bodhisattva Avalokitesvara And His Symbolic Mantra "OM MANI PADME HUM".* Lalitpur: Subhash Printing Press.

Bhattacharyya, Benoytosh. 1968 (1924). *The Indian Buddhist Iconography.* Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay (Reprint of the Second Edition 1958, Revised and Enlarged with 357 Illustrations).

Gellner, David N. 1996 (1992). *Monk, Householder, and Tantric Priest: Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual.* New Delhi: Foundation Books (Cambridge University Press), Reprint.

Locke, J. 1980. *Karunamaya.* Kathmandu: Sahayogi Press.

Locke, J. 1987. "The Upoṣadha Vrata of Amoghapāśa lokeśvara in Nepal." *L'Ethnographie* LXXXIII: 100-101.

Meisezahl, R. O. 1967. "Amoghapāśa." *Monumenta Serica* 26: 455-496.

Nepali, Gopal Singh. 1988 (1965). *The Newars: An Ethno-Sociological Study of*

a Himalayan Community. Kathmandhu : Himalayan Booksellers, Riprint.

Pal, P. 1966. “The Iconography of Amoghapāśa lokeśvara (I).” *Oriental Art, New Series*, XII, 4: 234–239.

Pal, P. 1967. “The Iconograpy of Amoghapāśa lokeśvara (II).” *Oriental Art, New Series*, XIII, 1: 21–28.

Petech, Luciano. 1984. *Mediaeval History of Nepal*. Roma : Is MEO.

Regmi, D. R. 1965/1966, *Medieval of Nepal*. Part I, Part II, Calcutta : Firma K. L. Mukhopadhyay.

Takaoka, H. ed. 1981. *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*. Vol. I, Nagoya : Buddhist Library.

Tanemura, Ryugen. 2007. *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā : A Critical Edition and Annotated Translation of Selected Sections*. Groningen Oriental Studies, Groningen : Egbert Forsten.

Tuladhar-Douglas, Will. 2006. *Remaking Buddhism for Medieval Nepal : The Fifteenth-century Reformation of Newar Buddhism*. New York : Routledge.

Yoshizaki, Kazumi. 2012. *The Kathmandu Valley as a Water Pot : Abstracts of Research Papers on Newar Buddhism in Nepal*. Kathmandu : Vajra Publications.

［日本語］

乾仁志　1984「Vajradhātu mukhākhyāna について」『印度学仏教学研究』32（２）：166–167（724–725）。

シャキャ・スダン　2015「ネパール仏教における三宝帰依と三宝マンダラ――梵語及び梵語・ネワール語混成資料を中心に――」『密教学』51：211–227.

佐久間留理子　2011『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林。

佐久間留理子　2015『観音菩薩――変幻自在な姿をとる救済者――』春秋社。

佐久間留理子　2017「ネパールの不空羂索観自在マンダラ――儀軌と布製絵画――」『印度学仏教学研究』65（２）：886–892（147–153）。

立川武蔵　1987『曼荼羅の神々――仏教のイコノロジー――』ありな書房。

立川武蔵編著　2015『ネパール密教――歴史・マンダラ・実践儀礼――』春秋社。

田中公明・吉崎一美　1998『ネパール仏教』春秋社。

種村隆元　2013「密教とシヴァ教」桂紹隆・斎藤明・下田正弘・末木文美士編『大乗仏教のアジア』シリーズ大乗仏教10、春秋社、pp. 73-102。
山口しのぶ　1995「*Balimālā* の観想法」『印度学仏教学研究』43（2）：840-842（211-213）。
山口しのぶ　2005『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林。
山口しのぶ　2016「ネパール――ネワール仏教の儀礼を中心に――」高橋尚夫・野口圭也・大塚伸夫編『空海とインド中期密教』春秋社、pp. 79-90。

註

(1)　歴史的背景として14世紀の末頃に登位したスティティ・マッラ王が、当時仏教徒が多数派であったネワール族をカースト制度に組み込んだことが挙げられる（Regmi［1965：641-661］、Nepali［1988：146-150］、田中・吉崎［1998：5-6, 22-24, 197-201］）。

(2)　Gellner［1996：164］は、1507年の古文書に基づき、過去には VA の地位はシャキャにも開かれていたようであると指摘する一方、「今日では対照的にヴァジュラーチャーリヤの息子のみが、金剛［乗］のマスター（Vajra-Master）として聖化されることを許される。そして彼らすべては、僧侶になることを運命づけられていようがいまいが、必然的に聖化される」と述べる。

(3)　このような密教儀礼の二面性については、Tanemura［2007］、種村［2013］が『クリヤーサングラハ・パンジカー』等について指摘する。

(4)　ケサル図書館（カトマンズ市）に14世紀（A.D. 1361）の『聖不空羂索経』の写本（n. 136）が残されており（Petech［1984：130］）、ネパールの不空羂索観自在信仰は、文献的には少なくともこの頃までに遡る。

(5)「観自在」は「世自在」とも呼ばれる。

(6)　なお後述するように、布に粉で描かれる単独尊形式の実際のマンダラを加えれば、不空羂索観自在のマンダラは五種類となる。

(7)　山口［2005；2016］。なお Tuladhar-Douglas［2006：163-186］には不空羂索観自在とヴラタ儀礼との関係が言及されるが、不空羂索観自在の三三昧は取

り上げられていない。

⑻　佐久間［2015：129-136］では概略を紹介した。

⑼　筆者は、2013年３月19日にカトマンズ市内においてSarvajñaratna VAによって執り行われた事例を調査した（科研費23520077による）。儀礼の基本情報はこれに基づく。

⑽　B, pp. 3-4.

⑾　V, pp. 28-29, 34-37, 40-42.

⑿　V, pp. 56-58, 76-78.

⒀　fols. 4a1-4b8, 6b2-8a8, 10a8-11a2.

⒁　この写本の情報はIain Sinclair博士より提供された。記して感謝する。

⒂　fols. 85a2-86a1.

⒃　Sarvajñaratna VAを導師とする実際の儀礼の観察（2013年３月19日、於カトマンズ市内同師宅）及び同師の備忘録に基づきながら印刷本（V）を参照して作成した。

⒄　このマンダラは、ネワール仏教では一切の儀礼に先立って供養される。

⒅　乳、ヨーグルト、バター溶液、牛糞、尿を指す。

⒆　*Vajravārāhī*を象徴する。

⒇　導師の部が始まる前に描いておく場合もある。

(21)　各々の象徴と菩薩との対応関係は以下の通り。組紐文様：弥勒、白蓮：虚空庫、幢：普賢、水瓶：金剛手、払子：文殊、双魚：除一切蓋障、傘：地蔵、法螺貝：虚空蔵。

(22)　インドでは、*APH*、*APK*といった初期密教経典に不空羂索観自在の陀羅尼やマンダラ供養法が説かれるが、Avでは不空羂索観自在は中期密教的な三三昧によって礼拝、供養される。

(23)　筆者が観察した儀礼では、金剛製の阿閦仏が祭壇に置かれていた。

(24)　ネワール仏教儀礼では、主要な儀礼の最後にバリ供物を捧げる（山口［1995：840］）。*Balimālā*の「第一のバリの観想」と概ね同様の観想を行う。実際の儀礼では、導師の左手前にある二つの黒い旗が立てられた護世バリ（*Digpāla-bali*）にミルクを注ぐ。

(25)　実際には仏塔のような形をした小さな粘土の数個の塊を、三宝マンダラの上

方に置く。

(26) 三宝マンダラは、シャキャ［2015］参照。

(27) 現前のマンダラにヴラタ・スートラを捧げ、それに塗香、華、線香、食物、ポップライスによる五種供養（Pañcopacāra-pūjā）を行う。これらの供物は他のネワール儀礼でも使用される（山口［2005：154-155、註24］）。

(28) 両手を合わせ薬指を立てる印であり、薬指は須弥山に見立てられる。チベット仏教徒が六字真言を唱えて結ぶ印と同様である。

(29) ネワール仏教では、須弥山世界は「宝マンダラ」と呼ばれ、宝マンダラ印は須弥山世界をかたどったものとされる。また印を結ぶ者自身も須弥山世界であると言われる（山口［2005：52-53］）。このような文脈で考えれば、導師の指導のもと宝マンダラ印を結び、宝マンダラを捧げる施主（導師の弟子）は、この次第で須弥山そのものでもある自らを三宝に捧げることになる。

(30) V（p. 31），*AS*（fol. 6a2-3）によれば、正式名称は bhāvyamānā-vaimaṇḍala ity ādiyoganāma-prathamaḥ samādhiḥ（「修習されている一切のマンダラ」という第一のヨーガと名づけられる最初の三昧）である。儀礼僧として活躍する Rājan Saptamuni VA（R. S. VA）氏（パタン市ブ・バハ所属）によれば、この三昧は輪廻世界をすべて不空羂索観自在のマンダラとして観想することであるという。なお同氏の聞き取り調査は、2016年 8 月20日に Surendra Man VA（S. M. VA）氏（トリブバン大学講師）の自宅（カトマンズ市）で行われた。

(31) *AS* によれば、本文に示す諸尊の nos. 15-17の代わりに次の十七尊が挿入される。1. Amoghadarśiṇī, 2. Sarvāṇayaviśvadhaniṅgulī, 3. Suraṃgamā, 4. Sarvaśokatamānirghātanī, 5. Gaganavilokinī, 6. Gandhahastinī, 7. Jñānaketu, 8. Jñānavatī, 9. Amṛtābha, 10. Amṛtavatī, 11. Candrasthavyavalonī, 12. Jvālinī, 13. Mahājvālinī, 14. Vajragarbhā, 15. Akṣayakarmāvaranaviśādhanī, 16. Pratibhānakuṭā, 17. Samantabhadra.

(32) V では本尊の心臓に位置する。

(33) V では本尊の臍に位置する。

(34) 四方と四維における諸尊配置の順番は第一輪の場合と同様である。

(35) なお *KS(2)*（pp. 133-138），*VDV(4)*（pp. 211-213）の「第一のヨーガと呼ばれる三昧」には、『初会金剛頂経』「金剛界品」（H 校訂本の文段番号19-28）

のように「五相成身観」が説かれるが、それは不空羂索観自在三三昧の「第一のヨーガ」では述べられない。

(36) V（p. 34）には、Maṇḍalarāja-[a]grīnāma-dvitīya-yogasamādhiḥとある。*AS*（fol. 8a7–8）には、Maṇḍalānāgrīnāmadvitīyayogasamādhi とある。

(37) マーマキー、パーンダラー、ターラー、ローチャナー。

(38) *AS* では「三叉戟」。

(39) Vajrapāśa?

(40) *SM*（p. 49）, Bhattacharyya［1968：131–132］, 佐久間［2011：291–294］.

(41) 八聖地と八大菩薩との対応関係は次の通りである（*HKN*, Introduction and Translation, p. 10）。1. Maṇiliṅgeśvara（弥勒）、2. Gokarṇeśvara（虚空庫）、3. Kileśvara（普賢）、4. Sarveśvara（金剛手）、5. Gandheśvara（地蔵）、6. Phaṇikeśvara（除一切蓋障）、7. Gartteśvara（文殊）、8. Vikrameśvara（虚空蔵）。八聖地の場所は、*HKN*, Maps and Historical Illustrations, Map 5 参照。なお聖地の典拠は、ネパールにおいて15世紀頃に編纂された『スヴァヤンブー・プラーナ』（*SvP*）第四章にある。

(42) ［Bajracharya 2003：63］.

(43) V（p. 42）には、karmarāja-[a]grīnāma-sūkṣuma（sic. sūkṣama）-tṛtīya-yogasamādhi とある。*AS* には、これに相当する名称はみられない。

(44) 同氏については、註(30)参照。また同氏によれば、智（jñāna）は空性（śūnyatā）と同義であり、智マンダラと三摩耶薩埵とが合一することによって、導師は空（śūnya）を体得するという。

(45) B は V, *AS* と相違する箇所が少なくない。紙面の都合もあり B は省略する。

(46) V（pp. 43–47）には、*Balimālā* の「第一のバリの観想」と同様の観想を行い、帝釈天等の十四の護世尊の印契を結び、アムリタを流すこと等が説かれる。バリ供養は、導師の部の最後でも行われる。上記の註(24)参照。

(47) R. S. VA 氏によれば、三三昧は VA のみに許された実践である。

(48) このマンダラの諸尊は佐久間［2017］でも取り上げた。しかしそこでは T1–T3 のマンダラの諸尊との比較は行っていない。また *AP* の情報も収録されていない。

(49) この情報は、G. VA 氏、R. S. VA 氏、S. M. VA 氏から得た。

(50) 前者は Supratiṣṭhitaguṇamaṇikūṭarāja-tathāgata（*K* vol. 2：p. 122）であり、後者は Samantaraśmyudgataśrīkūṭarāja-tathāgata（*K* vol. 2：p. 120）である（佐久間［2017：888］）。

(51) なお *K* は、Av が実施される巡礼地の一つ、ジャヤティールタにおいて読誦される（V p. 93（解説箇所））。

キーワード　不空羂索観自在、マンダラ、ネパール、密教儀礼、現地調査